

## 1 海岸部の生きもの



天神崎の岩礁

### ① がんしょう 岩礁の動植物

広大な岩礁の周辺で、暖流黒潮に運ばれてきた多くの熱帯系の動植物、それら海の生物を育む海岸の森林。これらがこじんまりとまとまっている地域が、ここ田辺の天神崎・元島周辺に残されているのです。和歌山県下でも数少ない海岸です。この平坦で広い岩礁はしんせいだい新生代新第三紀の水平な地層で、比較的にもろく長い年月の間に波によって形づくられた自然の彫刻です。

天神崎から元島にかけて広がる岩礁は、一見単調に見えても実はたいへん複雑で変化に富んでいます。岩礁の大部分が大潮の満潮時には、すっかり水面下にかくれてしまうのですが、干潮時にはその全域が水面から姿を現します。その現れ方は潮位によって日々変わります。岩礁の先端部では、いつも外洋と接して荒波に洗われていますが、陸地側では波も静かな入り江が深く入り込んで、先端部とは違った生きもの世界がくりひろげられています。

干潮時に現れる岩礁の上には、さま



ウミトラノオやアオサ

さまざまな生きものが見られます。特に先端部では、冬には海藻のウミトラノオやヒジキが、まるでじゅうたんを敷いたように広がります。ウニが岩礁に穴をほり、その穴にムラサキウニや熱帯系のナガウニ類が住みつき「ウニのアパート」と呼ばれています。また、そこには美しいタカラガイ類も見られます。岩上に密生した各種フジツボ類、岩礁のすき間に密集しているカメノテやムラサキウニなどの大群は、ここ天神崎ならではの景観です。

早春のタイドプール（潮だまり）には多くの小魚やウミウシ、アメフラシ、タツナミガイなどの仲間が見られ、熱帯系の真っ黒で大きなニセクロナマコも目立ちます。黒潮の影響を受けてサンゴ類も生息しています。



ヒジキ



ナガウニ



カメノテ



タツナミガイ



ニセクロナマコ

## ② 海と森とのつながり

この岩礁や波静かな入り江に、たくさんの生きものが生活しているのは次のような仕組みからだといわれています。

陸地に近い海岸には山側から海の植物（海藻やケイ藻など）が成長するのに必要な物質が流れ込んできます。海岸に深い森があると、その量がちょうどいい程度にいつも流れてくることになります。その植物たちが稚魚の餌になるので、魚たちが産卵にきます。群れる小魚たちは、この安全で食べ物の多い岩礁地帯や入り江で成長し、沖合に出て大きくなります。また、岩礁に付着している多くの動物たちの中には、幼生時代は沖合でプランクトン（浮遊生物）として過ごし、餌の多い岩礁地帯に帰ってきて生活しているものもたくさんあります。このように陸地の森と海岸の浅瀬と沖合の海は、生きものを通してしっかり結びついているのです。

昔から日本人は海の生物を大切にするためには、陸地に森林を育てなければならぬと考えてきました。海岸の森を魚付林<sup>うおつきりん</sup>と呼び、その森を保全する制度として魚付保安林があります。

田辺付近でもっともすぐれた魚付林は、天神崎の近くにつながる元島の森と湾内に浮かぶ神島<sup>かしま</sup>の森です。二つの島の森は、昔から漁業の守り神として大切に残してきましたから、今も昔の姿に近い照葉樹林でおおわれているのです。



元島の魚付林

### ③ 鳥類

この地域は野鳥の観察にも適した地域です。コースにはいくつか考えられますが、次の3つが手頃です。

- (1) 元島に通じている防潮堤を渡り元島から岩礁の先端までのコース
- (2) 天神崎の岩礁地帯から岩礁の先端までのコース
- (3) 天神崎の湿地付近の地点から丘陵地<sup>きゅうりょうち</sup>を経て日和山<sup>ひよりやま</sup>へのコース



(1)と(2)のコースでは、シギ、チドリ、カモメ、アジサシなど、海辺の鳥類が多く観察できます。特に岩礁ではメダイチドリ、トウネン、ハマシギ、チュウシャクシギなどが見られ、運が良ければ海水を飲みにきたアオバトを見ることもあります。また、ミサゴが魚を求めて飛来する、ハヤブサが渡りの小鳥の群を狙っている、などのシャッターチャンスも、それほど珍しいことではありません。冬から春、田辺湾内に群れるカモメ、セグロカモメ、オオセグロカモメ、ユリカモメ、ウミネコなど多くのカモメ類や、ウミウ、カワウなどがあり、海の荒れた日には左会津川の河口付近に集結します。



メダイチドリ



ミサゴ



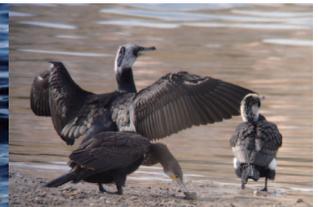
ユリカモメ



ウミネコ



オオセグロカモメ



カワウの親子